

3. 新町と木炭業

道 場 葉 子

- I はじめに
- II 新町―問屋としての位置―
- III 木炭業者のその後
- IV 考察

I は じ め に

旧鶴来町（16町）の中でも、とりわけ商店の割合が多く、かつては商業地区として栄えた新町。現在は、商店の数も1つ2つと消えてゆき、かつての“鶴来の中心の座”を本町にゆずっている。中でも衰退が著しいのは、木炭業である。ここで言う木炭業とは、かつて新町に15、6軒はあったといわれる炭問屋のことだが、今や1軒も残っていない。問屋は、消費地にある小売店と生産者をつなぐ仲介者である。新町に問屋が成り立っていたのは、戦前には鉄道が通っていなかったという交通事情のためだった。製炭地である山から消費地に歩いていくには、1日では無理で、位置的に中継点となったのが旧鶴来町であった。おそらく理由は距離の問題だけではなく、製炭者が小売店に直接売ることができなかったとも考えられるだろう。しかしその位置は今も変わらないのに、衰退していったのはなぜか。単なるエネルギー源の移り変わりだと言いきれぬのか。「炭」は新町に何らかの影響を与えたのか。「炭」を通じて築いた山とのつながりは、今でも存在するのだろうか。本稿は、かつて木炭問屋を経営し、今もなお新町に暮らす人々や、炭は扱っていないが、新町で他の商売をしていた人々からの聞き取りに基づいての考察である。

II 新町―問屋としての位置―

問屋は、生産者と消費者を結びつける重要な位置にあり、その役目を果たしてきたのが新町である。旧鶴来町といえば、炭の生産者の住む山地と消費者の住む金沢、松任をはじめとする平野部との中間点に位置する。さらに、その旧鶴来町の中でも新町は、山に最も近い位置にあったため、山との関係が深かったのうなづくことができる。歩いて下りるしか方法がなかった山の人々にとって、旧鶴来町とりわけ新町、今町あたりは、宿泊地としては最適であった。鉄道も通っておらず、自動車もないという交通事情のため、山と消費地が直接取り引きするのは不可能であった。山の人々は炭を新町まで持って下りると、自給できないさまざまな消費物資、たとえば衣料品や醸造製品あるいは、製炭作業に必要な刃物や出荷のためのわら製品などを買って山へ戻って

ゆく。そのため、新町は炭問屋はもちろんのこと、山の人々に売る食料や生活必需品を扱う店も、山の人々のおかげで潤った。

こうして、生産者（山の人）－問屋（新町）－消費者（金沢など）の関係は、でき上がったのである。そこで以下では、新町と山との関係、新町の問屋としての位置づけ、新町と問屋の関係を詳しくみてゆく。

1. 新町と山との関係

炭の生産者は、河内村、吉野谷村、尾口村、そして内川上流部の堂、菊水に多くいたようである。彼らが炭を運んでくる方法は、時代によって変わっていった。明治の頃は、炭俵をかついで歩いて新町まで来ていた。男の人なら2俵、女の人なら1俵を背中にかついで下りて来たという話である。大正に入ると木炭業も盛んになり始め、何俵かの炭を荷車でまとめて一度に山から持って下りる人や、馬車を利用する人々も出てきたそうである。ちょうどその頃、旧鶴来町内、特に新町、今町に「馬車ひき」という運送業者があらわれたようだ。彼らは新町の問屋から注文を受けたり、直接山に住む人から注文を受けたりして、山まで炭を取りに行き、新町の問屋まで運ぶ。

それ以後は、道路改修が進むにつれ、荷車や馬車の利用も増え、昭和に入ってから、トラック利用へと漸次変わっていった。

このように、山の人々は時代によって手段を変えながら新町に炭を運んできていた。中でも特に、昭和に入っても徒歩で炭を運んできていた山の人々に対する、新町の人々の印象は様々であった。

木炭業には携わっておらず、当時子供であったAさん（1923（大正12）年生まれ）やBさん（1940（昭和15）年生まれ）は、「山の人にはねえ、なんてゆうか、古くさい感じやったねえ。おにぎりもね、ふろしきみたいなものに包んで、背中に結んでもってくるんや。」と、山の人々の様子を話す。子供の頃、家が木炭業を営んでいたというCさん（1912（明治45）年生まれ）は「（山の人々が古くさいなんて）と一んでもない！山的人是優しい人ばかりやしね。お得意先やもんね。田舎者だなんて、なーんも思わなかったよ。」と話す。山の人々というのは、一部の新町の人々にとってのお客様であったが、子供にとってはただの山から来た人だったのだろう。一部の人々にとっての、というのは、新町で、山の人々を対象にした商売をしている人々のことで、先に述べたような、山の人々の炭俵を運ぶ「馬車ひき」といった人々がそうである。山には店がなかった頃であるから、山の人々の買い物場所は鶴来が主であったと思われる。炭の取引が盛んになり、山の人々が炭を持って下りてくる回数が頻繁になればなるほど、新町は潤っていった。「馬車ひき」以外にも、新町の人々が山の人々のおかげで潤った商売はいくつかあるが、それについては3で詳しく述べることにする。

2. 新町の間屋としての位置

新町に存在していた木炭問屋は、最盛時に15、6軒であったという。この数は実に鶴来地区に存在した炭問屋の3分の2に値する。明治時代には、すでに木炭取引が行われていたが、そのピークは、新町の人々の話によると大正、昭和初期だったようである。明治時代に盛んであった煙草の製造販売が、1904（明治37）年に政府の手にゆだねられてから、木炭の地位は高くなり、交通の発達も手伝って、その生産は増大の傾向をたどり、鶴来炭商の活躍はいっそう著しくなったようである。

木炭商の仕事は、山から炭を集め、消費地の小売店に売ることである。その1つ1つ、集荷、決算、出荷の方法について述べていく。

まず、集荷方法は2種類あった。2種類とは、「焼き手間」という方法と、「木炭購入」という方法である。

「焼き手間」というのは、製炭者を雇って、自分の持山で炭を焼かせる方法で、「木炭購入」はすでに製炭した炭を購入出荷する方法である。後者の方が古い形態で、これによる炭商が多かったという（『鶴来商工会70年史』207）

「焼き手間」による場合は、木炭商が自分の山に焼子と呼ばれる製炭者¹⁾を雇い入れ、カマの費用や食料品などを送り、製炭の手間賃を払った。焼子は家族を伴って山に入り、小屋住まいをして製炭をした。木炭商にとって、「焼き手間」は利益が大きい。焼子の世話や原木の購入など手数料がかかり、また製炭や原木の見立など豊富な知識を必要とした。木炭商と焼子とは、雇用者と被雇用者という関係で、時に木炭商は焼子にお金を貸すこともあったらしい。

「暮れのね、12月9日の山祭りの日になるとね、山の焼子さん達が皆んな山から下りて家に来てね、宴会をするんよ。」とDさん。(1943(昭和18)年生まれ)が言うように、山祭りの日に焼子を招待するのが常であったらしい。——その際ふるまうお酒のことを“サンニョー酒”と呼んだ。

これに対して、「木炭購入」は焼子を雇わないために簡単であった。製炭者²⁾は、自分の持ち山を焼くか、原木を自ら購入して焼いた。これら製炭者に対して、木炭商は食料品・縄・俵などを売り、あるいは資金を融通し、製品としての木炭を引き取ったのである。

上記のように、「焼き手間」と「木炭購入」の区別は、はっきりしているのに、新町の人の口からその言葉は出てこなかった。Dさんの場合、昭和生まれということなので、焼子を招いて宴会を行っていた頃のこととは、聞き伝えられた話であったり、おぼろげに覚えている程度のことであったりするため、当時の取り引きについてあいまいな点が多いのも止むをえない。しかし当時のことをかなりははっきり覚えているというFさんの話は次のとおりである。

「うちは白峰に山を持とったんや。で、山の炭焼きのもんに『うちの山でどんだけ炭焼ける。?』って聞くやろう。そうすると山のもんが『だいたい600³⁾くらいやな』って言ったとする。

そしたらこっちは『んなもん…800くらい焼けるやろ?』っていうんや。で、結局は両方の意見をまとめて『700くらいにするか』ってことになるんや。そして、自分の山で炭焼いてもらうんや。その代わりにこっちは米やらみそやらを山へ送る。そういうやり方しとったんや。」

Fさんの口からさえ、この段階では「焼き手間」という言葉は出てこなかった。この後、それは「焼き手間」という方法か、という筆者の質問に対して初めて「そうや、『焼き手間』や。」という返事が返ってきた。しかしこの時も、筆者が促したために出てきただけであって、Fさんから話したわけではない。現在新町に残っている元木炭商の人々も、実際に木炭問屋を運営していたのは自分ではなく、親であったり、祖父であったりするの、「焼き手間」という呼び方を知らなかったのかもしれない。しかし、Fさんの口から聞くことができたのであるから、「焼き手間」や「木炭購入」といった用語は、文献の中でしか用いられなかったわけではなさそうである。

次に決算であるが、これは盆・暮れ年2回であった、と新町の人々は口をそろえて言う。盆の頃、炭が商品として山からできてくる。その段階で製炭者は、1年間の生産量を見積もり、だいたいその半分のお金を木炭が製炭者に渡す。暮れには、縄や俵など木炭商が供給した品を差し引いた残りの額を払う。これが、盆・暮れ決算であった。ここでいう暮れとは、12月9日の山祭りの日のことである。

年2回の支払いとなると、1回の支払はかなりの金額になるはずである。木炭商は一体どのようにして資金を調達していたのか。このことについてDさんは次のように話す。

「うちの父親はね、暮れになると銀行へ行ってね、頼むのよ。お金を貸してもらうのに。焼子さん達に払わなきゃいけないでしょ。大変だったのよ。(笑) そうして借金をして金沢へ炭を売りに行って春までにお金を儲けて、それで銀行に返すの。その繰り返しよ。」焼子達が暮れに持ってくる炭を売ってはじめてお金になるのだが、まずは焼子達に支払わなければならない。そのために借金をしなければならなかったのだろう。

最後に、出荷方法であるが、まず出荷先についてふれると、旧鶴来町に集まった炭は、主に金沢方面へ出荷されていたらしい。鶴来木炭は能登木炭より質が良く、炭価も小松とほとんど同じだったが、金沢よりはずっと安かったため金沢へ出荷されるのは当然のことであったのである(表-1参照)。

そして出荷の方法であるが、1915年に軽便鉄道が開通するまでは、荷車に炭を積み、売りに行っていただろう。鉄道開通後は、鶴来から西金沢駅まで貨車で炭を運んだのである。しかし、この線には4トン貨車のみしか入らなかったため、西金沢駅で北陸線の8トン貨車に積みかえた。そのため、西金沢には木炭倉庫を用意してあったそうである。

このようにして、鉄道開通後、1921年頃までは、武生、今庄の商人が買い出しにきて、東京、大阪、鎌倉、逗子などに出荷していた程鶴来木炭の市場は広がった。しかし、昭和に入ると、岩

表－1 鶴来谷木炭の流通事情 1929（昭和4）年

			生 産 者		鶴 来 町 へ の 出 荷 量 (俵)	鶴 来 町 以 外 へ の 出 荷 量 (俵)	備 考
			俵 数	貫 数			
木炭検査鶴来出張所	管内	白 峰 村	184,694	923,470	123,694	約 61,000	福井県へ約31,000俵 金沢市その他へ約30,000俵 能美郡町村へ
		尾 口 村	60,927	304,575	60,927		
		吉野谷村	45,154	225,057	30,154	約 15,000	
		河 内 村	78,532	388,404	78,532		
		鶴 来 町	2,030	9,870	2,030		
		額 村	2,296	11,185	2,296		
		計	373,633	1,862,561	297,633	約 76,000	
	管外	鳥 越 村	—	—	約 30,000		堂・後谷で生産
		山 上 村	—	—	約 4,000		
		内 川 村	—	—	約 20,000		
計					351,633		2,132,561貫

県木炭検査鶴来出張所調査 『鶴来商工会70年史』206

手を主とする東北や島根の木炭が県外市場に進出し、鶴来の木炭商はこれらに押されて県外に販路を縮めたのである。しかし県外移出こそなくなったが、炭は木炭商が各自契約した運送業者のトラックで金沢へ出荷されていたようである。

トラックの運転を頼み、自分は隣に一緒に乗って行き、金沢で炭を下ろし、ついで集金をしてから帰るという方法をとっていた人もいたという。

3. 炭問屋と新町の関係

炭取り引きが盛んになれば、山から下りてくる人々も多くなる。そこに目をつけて、「馬車引き」といった商売を始めた人がいたことは、先にも述べたとおりである。その他にも、山の人々を対象にした商売の1つとして「煮うり屋」がある。「煮うり屋」⁴⁾とは、朝早くにおにぎりだけを持って山から下りてくる人々に、温かいみそ汁やそうざいを出す店のことである。家の玄関が広がっており、そこで食べてもらうのである。その間馬をつないでおいだ馬環が、今でも新町の道すじの家に残されている。「新町の通りにはズラーッと馬とか馬車が並んだもんや。」という新町の人の声から、木炭取り引きが、いかに盛んであったかが分かる。又、しょう油や味噌といった食料品の製造販売する商売も栄えた。これらの商売においても、山の人々は重要なお客さんであった。現在でも、当時からの縁で山から新町まで買いに来ているひともいるということで

表－2 木炭価格の推移

(黒炭丸上1俵当たり)

年 度	鶴 来	金 沢	小 松
	円		
1924(大正13)年	2.00	2.35	1.09
1925	1.80	2.10	1.85
1926(昭和元)年	1.75	1.85	1.70
1927	1.75	1.90	1.80
1928	1.40	1.65	1.60
1929	1.40	1.55	1.45
1930	1.20	1.25	1.05
1931	0.75	0.85	0.80

『鶴来商工会70年史』206

ある。さらに、米屋や酒屋も山の人々を対象としていたといっても良いだろう。木炭商が山の焼き達のために、新町で食料品やお米やお酒をそろえて山へ送る場合もあったらしい。

このように見てみると、新町の商売は、木炭問屋が多く存在したため栄えたといっても良いだろう。それでは実際どんなに栄えていたのかは、次にあげる木炭問屋の話から分かるだろう。

木炭取り引きが盛んだった頃、通り沿いの木炭商の家にはトロッコが引かれた家もあった。玄関に積まれた炭を裏の蔵まで運ぶためである。Gさん（1921（大正10）年生まれ）の家の玄関にも、炭を扱っていた頃はトロッコが引かれていたという。「わしが小さかった頃は、この家の玄関らへんは炭でいっぱい、黒一くなつたわ。」とGさんは話す。

ピーク時には、毎日山から炭が下りてきていたということであるから、玄関は毎日炭でいっぱいだったのだろう。

Ⅲ 木炭業者のその後

鶴来木炭同業組合は、すでに1901年に組成されていた。Ⅱの2で述べたように、それまで旧鶴来町の重要な商売であった煙草の製造販売が政府の手にゆだねられてから、木炭の地位は高くなっていた。1924年に鶴来におかれた金沢木炭検査所の出張所が、1929年に独立し、鶴来木炭検査所となったことは、鶴来での生産量が増えたことを表しているともいえるだろう。集荷された木炭の生産地は、鶴来谷の（手取川上流域）ほか山上、内川・額谷へもおよんでいた。

これほど発展していた木炭業も、第2次世界大戦が終わる頃にはかなり衰退してしまった。木炭業者のその後を、町の人々の声から分かる範囲で追ってみると、大きく2つに分けられる。商売は続けているが、別の物を扱っている人（商売替えをした人）と、商売をやめてサラリーマンになった人である。前者は12人中8人で、残りの4人は後者である。⁵⁾ 彼らが木炭業をやめて次の商売を始めたあるいは商売自体をやめた理由は一体何だったのか。次の3つの理由が考えられるだろう。

- 1) 燃料・エネルギー源の変化
- 2) 第2次大戦中の木炭配給制度
- 3) 山の所有権の放出

以上について、検討してみる。

まず、エネルギー源の変化はたしかに木炭業衰退の重要な理由の1つと考えられるが、それだけでは説明できない。なぜなら、石油やガスといった競合燃料が一般家庭に普及したのは、1950年代後半以降で急速に衰退した第2次世界大戦前後のやや後だからである。新町の炭問屋の多くは、石油やガスの需要の増加に押されて炭を扱うのをやめたわけではなかったようである。

2つめの理由として考えられる配給制については、元木炭商の声をもとに検討してゆく。戦争中は、物が配給制になったため、旧鶴来町内にあったすべての炭問屋が営業できなかったらしい。

例えばGさんの話は次のとおりである。

「わしは戦争行っとったからな。戦争中のことはよう分からんけど、帰ってきたら、うちでは木炭業をしてなかったんや。たぶん、戦争中に配給制や何やで、できんくなったんやろう。新町にあんなにたくさんあった問屋もなくなっとった。」さらにはっきりと戦争中の炭問屋の様子を話してくれたのは、Gさん宅で一緒に暮していたHさん（1914（大正8）年生まれ）である。

「配給制でね、木炭問屋ができなくなったのよ、失業よ、失業。突然だもん、何も仕事が無かったの。お米屋さんみたいに補償金ができるわけでもなかったし、ひどかったわよ。」

Gさん、Hさんの話から分かるように、戦争中は炭問屋にとっての試練の時であった。しかし、すべての人が生活に困っていたわけではなかった。Fさんは次のように言う。「戦争中は、なーんもしとらんだよ。煙草で儲けた預金があったさけ。」Fさんが、その1例だが、明治時代には煙草を扱っていた木炭商もいた。Fさんのように煙草そして木炭と商売を替えてきている人は、常に時代の流れをとらえていたといっても良いだろう。しかし、配給制という国の制度に対抗できず、戦争中はすべての炭問屋が休業させるを得なかった。この時期に新しい商売に目をつけた人もいた。木炭の代用品としてコークスと粉末を煉って作った「豆炭」を製造販売していたらしい。又、戦争中は何もしなかったが戦後、再び炭を扱い始めた人もいた。中にはGさんのように、問屋ではなく小売りとして始め、北鉄の薪自動車用に売っていたという話もある。ともかく、戦後も新町の炭問屋は完全には消えてはいなかった。さらにIさんのように、戦争とは関係なく昭和初年に現在の醸造業の権利を買い取り、炭問屋をやめてしまった人もいたので、配給制のみが決定的な理由とも言えないように思う。

3つめに、木炭商が山を手放したという理由はどうだろうか。新町の人は山を持っている人が多く、特に木炭商の中でも「焼き手間」という集荷方法をとっていた人は山持ちだったはずである。その人々が山を手放したとすれば、炭が集荷できなくなって、木炭業をやめたと考えられるが、実際に山を手放した人の例は聞かなかった。例えば、Iさんは辰口村や鳥越村に、Eさんは白峰村にそれぞれ現在も山を持っているそうである。だから3つめは、有力な理由としては考えられない。

このように1つ1つの理由を検討してみたが、いずれか1つの理由からでは説明できないといえるだろう。エネルギーの変遷で需要がなくなり炭問屋をやめたという人もいれば、戦争中に生きてゆくための別の商売に替えたという人もいれば、戦争前に別の商売を始めた人もいる。戦後は、製炭者の高齢化と減少も影響している。どれか1つが決定的理由で衰退したのではなく、様々な理由がからみ合っていることであつたと思われる。

IV 考 察

本稿では、炭を通して新町を見てゆき、「炭が新町に与えた影響は何であつたか」をみてゆく

つもりであった。しかしⅡで述べたように、炭によって新町はかなり経済的に潤ったのにもかかわらず、その炭に対して木炭業者は特別の執着をもっていなかったように見える。例えば、「炭問屋をやめる時に、何か感じなかったか」という問いに対して、筆者の予想を裏切り「未練はなかった」という答えが返ってきたことからうかがえる。炭によって栄えた新町であるから、炭に対する思い入れも強く、商売替えもやむを得ずの理由があつてのことだろうと予想していたのだ。しかし新町の人々の返事から、人々は炭にこだわっていたのでもないように思われる。炭が人々に影響を与えたというよりも、人々が生きる手段として、煙草の次の商売として木炭を選んだといえるのではないか。

本稿では詳しく取り上げなかったが、旧鶴来町では木炭以前に煙草を商取引きの中心として扱っていた。明治時代は煙草が中心で「鶴来煙草」として栄えていたが、1904年に、その製造販売が政府の手にゆだねられてからは衰退の一路をたどっていった。煙草で栄えていた鶴来の産業は大きな打撃を受けたが大正時代には木炭を扱うことによって復活していた。木炭が大正から昭和初年の鶴来の産業の中心であった。昭和初年にピークとなるが新町の人々はすでに明治時代から木炭に目をつけていたらしい。大正には新町に15.6軒の炭問屋があつたらしいということであるから、ピーク時に波に乗って始めたわけではなく、先読みしていたことになるだろう。では、なぜ商人達は木炭に目をつけたのだろうか。考えられる可能性は以下の3つであろう。

- ① 1915年に石川鉄道が、1925年には能美鉄道が開通
- ② 乗合自動車が鶴来から金沢・松任・白峰などに運転
- ③ 都市の発展が著しくなった。

①、②の結果、鶴来への人の往来が極めて便利になった。山との行き来が便利になったことは林産物の扱いを容易にしたと思われる。また、③から、木材や木炭の需要が増大したと思われる。都市の発展に伴い、建築物が増加したであろうし、大正時代の家庭の主要なエネルギー源は木炭であったことから推測できるであろう。さらに、煙草業が衰退した時期が、第1次世界大戦を契機とする経済の発展期であったことから、鶴来の人々が林産物に目をつけ、成功したといえるように思う。いち早く状況を把握したことが成功につながったのだろう。この判断が新町の商人にはできたのである。「生きるために、その時代に合った商売を選ぶ」という商売人の気質が新町の住民にうかがえる。

時代に合った商売を常に考える、儲かる商売を選ぶのが商人といえるかもしれない。だとしたら、明治に盛んだった煙草をやめた後林産物に目をつけ、大正、昭和初年に木炭で栄え、今なお商売を続けている人が半数という新町は商売人の町といえるのではないか。戦後すぐにエネルギー源が移り変わったわけではなく、実際再び木炭業を始めた人もいたのに商売替えをした人々が半数以上である。需要がある時期に商売替えするのは先を見てのことである。又、木炭業が盛んだった時期に、山の人々を対象として木炭以外の商売を始めるといふ状況判断。これも新町の人々の

商売人気質といえるのかもしれない。

木炭は衰退したのだが、衰退したというよりも木炭商が次の商売を選んだ結果の衰退であるように思う。Fさんは次のように言う。

「新町の人ねえ。先見の目があるってゆうんかなあ。常に先を見て商売しとるんやな。だからやめる時もスパッと。儲からなかったら次の商売を始める。」

この気質ゆえの木炭業衰退であったのだろう。そして今後も「時代に合った商売」を求め続けるだろう。

注

- 1) ここでいう製炭者には、山に住む人が多かったということである。
- 2) 上に同じく山に住む人であるが雇い主がない点が違う。
- 3) この場合単位は俵。
- 4) 煮ごり屋ともいったらしい。
- 5) 転業者のうち分けは、プロパンガス販売業1軒、醸造業1軒、酒屋1軒、郵便局1軒、林木業2軒（以上は1968年現在）。『鶴来商工会70年史』による。